

平成28年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	京都造形芸術大学	職名	非常勤講師	助成金額	200,000 円
氏名	岸本督司 印	メール アドレス	papercrip@gmail.com		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
アドルフ・ロースの建築における素材の研究 思想と実践の両面から					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>本研究の目的は、20世紀初頭のウィーンを中心に、フランスやチェコでも活躍した建築家、アドルフ・ロースについて、その使用素材と彼の言説を突き合わせることでその建築作品の特性と近代建築における意義を改めて問い直すことである。</p> <p>財団せせらぎより支給された助成金を活用し、2017年2月にウィーン、プラハ、ピルゼンへと調査旅行を行った。助成金の使途は以下のとおりである。</p> <p>渡航費 約100000円（関西国際空港⇄ウィーン シュヴェヒャト国際空港） 現地での交通費 約30000円（ウィーン市内交通フリーパス、ウィーン⇄プラハ、プラハ⇄ピルゼン等） 滞在費 約40000円 調査費（博物館、公開されている家屋の見学費等） 約10000円 資料購入費 約20000円</p> <p>まずウィーンに滞在し、新たに刊行された研究資料の入手と博物館、図書館での調査、そしていくつかの建物の見学を行った。とりわけロースが活動初期に手掛けたボスコヴィッツという人物のアパート室内が近年修復され公開されており、ウィーン市内でロースの室内空間が調査可能な貴重な例となっていたが、今回訪れることができ、これまでは資料からのみであったロースの室内空間について実見し、被覆素材が実際にどのように見えるかを観察した。</p> <p>つづいてチェコに移動し、まずプラハでミュラー邸を見学した。同邸を訪れるのは二度目であるが、今回はとりわけ各空間の役割と部屋と部屋の関係、そして表面の仕上げ素材に着目した。さらにピルゼンにおいて複数のロースの室内空間の内部を調査した。これらの室内空間は上にあげたウィーンのボスコヴィッツのアパートと同じように近年修復が行われ公開されたものであり、しかもボスコヴィッツのアパートでは食堂やサロン、バスルームであったが、ピルゼンでは寝室や台所といった生活上の機能を担う他の空間も公開されていた。こうした空間同士の関係やそこに施された被覆素材を実地に観察することができたのは貴重な経験であった。</p> <p>上記の調査旅行を通じて得られた成果としては、とりわけロースの室内空間について、すでに知られているように家の内と外の断絶のみならず、家屋内での各空間の被覆にもその部屋の役割に応じた差異が設けられていたことが確認できた点、さらに、そのようにして作られた空間の雰囲気や裏切るような設計がなされていることを発見した点を挙げておきたい。特に後者は、寝室等に隠されるように作られた扉や収納の存在によって室内の雰囲気が破綻する契機となるが、これは空間の統一された雰囲気を重視するようなロースの言説と突き合わせたとき齟齬をきたすため興味深い。現時点では家屋の機能的側面と心理的な効果という側面へのロースの思考が現れたものと考えているが、さらなる検討の余地がある。今回の成果は下記論文において発表予定であるが、ロースの室内空間の特質を建物との関係で問い直すことにつながる重要性を秘めている。引き続きロース建築の都市空間との関係についても考察を深め、近代建築上の意義を問い直していきたい。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合はURLを記載すること。）					
発表者氏名 （著者・講演者）	発表課題名 （著書名・演題）	発表学術誌名 （著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月 （著書発行年月・講演年月）		
岸本督司	アドルフ・ロースの室内空間 素材とその効果を中心に	『人間・環境学』 京都大学大学院 人間・環境学研究所	2017年12月20日 掲載予定		